

# 「もじよかねえ。」

加藤 遥希

ぼくのひいばあちゃんは、今年の八月二十一日に、百さいになります。かみはまっ白で、歩けないので車いすをつかっています。九十六さいまでは、一人ぐらしをしていたけど、今はしせつでくらしています。

ぼくが小さいころ、ひいばあちゃんの家に会いに行くと、

「はるちゃん、よう来たねえ。」  
と、よろこんでくれました。お母さんが、ひいばあちゃんの家のそうじをしている間に、ぼくたちはトランプをしてあそんだり、ぼくのかいた絵を見せてあげたりしました。ひいばあちゃんは、ババぬきをするのが好きでした。そして、いつもぼくのかいた絵を見て、

「はるちゃんは、じょうずだね。」  
と、ほめてくれました。

でも、今はぼくのかおも名前もわすれてしまいました。さいしょは、かぞくの名前もかおもわすれてしまうなんてふしぎだな、と思いました。お母さんが、

「年をとると、だんだんわすれてしまうことがふえていくんだよ。でも、はるたちがおほえているからいいんだよ。」

と、話してくれました。ひいばあちゃんがぼくたちのことをわすれてしまった、かなしいけれど、元気でいてくれるからうれしいなと思いました。

今、ぼくたちきょうだいがしせつに会いに行くと、ひいばあちゃんは、ぼくたちのおおをじつと見つめます。ぼくのお母さんが、

「ばあちゃんのみまごだよ。」  
と、いうと、

「私のひまごかな。」  
と、目をほそくして、にっこりわらって、

「もじよかねえ。」

と、何ともいいながら、ぼくたちの手をにぎったり、ほったかを手をなでたりしてくれます。

ひいばあちゃんの手は、かさかさしているけれど、あったかくて、とてもやわらかいです。

ひいばあちゃんは、その手でむかし、きものをぬうしごとをしていたそうです。ぼくのお母さんが赤ちゃんの時にきたものを、ぼくのいもうとたちもおみやまいりの時にきました。何十年も前のきものだけど、とてもきれいな色です。お母さんは、

「これは、お母さんの宝ものだよ。はるたちの子どもが女の子だったらきせたいな。」

と、だじじにしまっています。ぼくもその時まで今のまま、きれいな色だったらすごいなと思います。

八月二十一日、ぼくたちはきょうだい三人でプレゼントをもってひいばあちゃんに会いに行こうと思います。

「百さいってすごい。ひいばあちゃんおめでとう。もつと、ずつとすつと長生きしてね。」

「長生きしてくれてありがとう。」

と、大きな声でいおうと思います。その時、また、にっこりわらって、

「もじよかねえ。」  
と、ぼくたちの手をにぎってくれるのが楽しみです。